

フィールドノートより

菊地栄子

eiko kikuchi

4月染井吉野の桜が咲くと、アミガサタケの噂が風にのり、山桜が咲き始めると、桜のハルシメジが動き出す。といってもこの時期、幼菌の大きさはまだ2mmほどでマッチ棒の半分にもみたない。白い頭、糸くずのような柄、独特の菌臭もまだしない。これがハルシメジの成菌になる。だがこの時期は花冷えなどがあり、気温が定まらないため、成菌までに思わぬ日数がかかったり、早々と茸虫の餌食になったりする。



1990年からの記録を見ると、平均気温18~20度あたりが発生目安、気温の上がる後出の茸は成菌になるのが早い。発生期間は10~15日間ぐらい、発生の波は1回(あっても2回)。林床は落ち葉、笹(篠竹)、葛、セリ科のような植物などで植生は豊かとは言えないが、ミニズなど地中生物が多いのだろうか、土は固粒化して黒い。

発生場所は、染井吉野が公園と公園に準じた所、山桜の5本は同じ山の林道沿い、山桜

系なのだろうか花期の遅い2本の桜は共に同じ公園。

このように桜ハルシメジの時期は、早い、色が目立ちにくい、梅林のようにまとまって生えない等見つけにくい。探すポイントは、アミガサタケが生える所よりも少し低めの位置、地表が乾きにくい場所など、意外と身近な桜に生えているようです。

これら桜ハルシメジの特徴は、傘の中心が突出、湿っている時は暗い灰色、桜のハルシメジが生えている地面の色に近い、土に帰化する頃の落ち葉の色に似ている。茎は最初、白っぽいが時間とともに胞子のピンク系の色になる。柄は汚い白、中空のものが多く、下にむかって太くなるシメジ型が多い。傘の径は2~8cm、柄の長さは3~8cm位が多い。匂いは梅のハルシメジより強いようだ。

(食=茹であるなど火を入れた時の匂いは、ガス漏れ、腐った魚の油臭などに譬えられる悪臭。しかし煮あげてしまったものは、味、大きさ歯ざわりなど良い茸と思う。)

「香りマツタケ味シメジと云うけれど…。ハルシメジは歯ざわりは良いけどねー、味は?」と思っている方へ—小ぶりのハルシメジで佃煮をおすすめ、味付けはご自由に、ただし煮返すこと三回以上。煮返すたびに味がよくなり、これぞ真のシメジなりと思えます。

ハルシメジと云えば梅、梅林搜し。初めの頃、ウグイスではないが梅園から梅園へ渡りまくった。ハルシメジの出会いが桜だった私は、桜の時期に探すので見つけることが出来ない。5月の始め、偶然通った梅林から、あの桜ハルシメジと同じ匂いが風にのってするではないか。覗くと梅林はハルジオンの真っ白い花で眩しくくらい明るかった。その花の中に、山の牧場で見た牛の糞状態のもの、15cm以上の大きな傘がひび割れて、桃色砥の粉まき散らし、重なりあった茸の塊、塊、塊、思わず一瞬立ち尽くす。大きな傘は18cm、柄の太さ2.8cm、桜との差は、幼児とジャイアント馬場ぐらい違った。

石段を10ほど登ると、雑草が茂り、切り落とした太い梅の枝がそのまま放置され、長く伸びた梅の枝が垂れ下がり、まるでジャングル状態、身を低く這う様に屈めなければ歩くこともできない。ハルシメジが生えてることで借りたHさん梅林。

この荒れ果てた梅林の手入れに矢部さんが、何日も何日も通ってくれて。お陰で見違えるほど綺麗な梅林に、そして吹春先生に教えられたように《ハルシメジの発生場所を中心にして縦10m横14mを区切り縦横2m間隔のロープを張って調査地をつくった》

その結果—

・梅のハルシメジ

発生は4月上旬～6月上旬

場所は毎年少しづつ移動

・梅紫フウセンタケ

発生はハルシメジより遅れて6月上旬

場所はハルシメジの生えた場所

そして隣りの梅の木に移る時も、ハルシメジが先、1年程遅れてフウセンタケが同場所



に発生する。又ほかの梅林でも初めに発生するのは、ハルシメジが先で、1～3年のうちに梅紫フウセンタケが発生(昨今この辺り多摩丘陵の状況です)

梅のハルシメジに初めて出会ったのは(1990年4月26日)都下稲城市の梅林、翌年、発生期間を知りたくて、1日おきに見に行くと同梅林で、4月26日～6月5日まで40日間も発生することがわかった。但し、シーズン初めの茸はしっかりしているのに、終わり頃の茸は傘も柄も匂いも弱くなるでもやし状態。此のとき、茸は1本残らず採取したが、梅紫フウセンタケはなかった。

梅紫フウセンタケと初出会いは、自宅近くの神社の梅林(1992年5月11日)。急いで他の梅林を調べると、下草は丈が低い、または裸地に近い状態の梅林で多く発生するようだった。そしてこの茸は、ヤグラタケのように茸を餌にするのではなく、ハルシメジの菌糸を餌にしている様に思えるのだが。

ハルジオンの根に白い菌糸が付いている！矢部さんと梅林の草取り中に発見。面白半分

に菌糸の付いた所に小枝を立てていくと、ハルシメジが生えた場所と一致、ハルシメジの菌糸かも！

2000年、Hさんの梅林に、ハルシメジが一本も生えない！梅紫フウセンタケも生えない！見回ると林床の様子が違う。あれほど咲いていたハルジオンが見当たらない。あっても数少なく草丈も小さく、その根に菌糸がない。

この変化は、梅紫フウセンタケと初めて出会った神社の梅林でも起こっていた。傾斜地に植えられた梅の木、最初にハルシメジが生えたのは一番下の木、梅紫フウセンタケが発生すると、逃げるように毎年上へ上へと登り、昨年は、一番上の木にハルシメジと梅紫フウセンタケが生えていたが、今年は何も生えない！ここもニリンソウ・ヤマタツナミソウなどが植えて、ハルジオンが消えた。

今年は、梅林のハルジオンの成長がどこも悪いようなのだ。何故だろう？梅林の外では大きく成長しているのだが。

消えたハルシメジは、梅林一面生い茂るカラスノエンドウの中に隠れる様に群生していた。一週間後、梅紫フウセンタケはまだ確認出来なかった。

春、バラ科の木の下に生える茸はハルシメジと云って食べられる、私が20年ほど前に読んだ本には、他に茸が生えないから安心とも。

しかし今や梅林は、梅紫フウセンタケは

普通に見られるし、先頃見つけたのは形こそ小さいがドクササコに似ていた？(見本を無くしてしまった)気を付けましょう。

ハルジオンは「原色日本帰化植物図鑑」(保育社)によると、北米原産。大正中期(1920年頃)渡来、花期は春～初夏、茎は高さ30～80cm(良く似たヒメジオンは花期が夏～秋)

「アレロパシー」Elroy L. Rice著 八巻敏雄・安田環・藤井義春 共訳には、「ハルジオンのメタノール抽出物中から3種類のC10ポリアセチレンを分解、利用しているのではないだろうか。

ハルシメジ(シメジモドキ)を研究して居られる小林久泰氏は「きのこの100不思議」日本林業技術協会編の中に「シメジモドキの菌糸は根の組織を破壊して栄養を獲得している。つまりバラ科植物に寄生している」と書かれています。

ある梅林の主人はトラクターを使って、除草を兼ねたマルチ行なう、15cmは確実に掘り返され、地表近くの梅の根は切られていますが、毎年多くの実を収穫しているそうです。

3月、4月ハルジオンの花の時期は同じ。ここに割り込む梅紫フウセンタケ。

6月上旬、ハルシメジが梅の根の破壊を終わる頃、ハルジオンの根に絡まっていた菌糸は、ボロボロと粉状態。11月末、翌春を待つ、ハルジオンのロゼット根に、清新しい白い針のような菌糸が付く。ハルジオンが消えた梅林から、ハルシメジが消えた。逆かな？